

マグダラのマリアやペトロたちが見た空虚な墓の記事において、福音書記者が主張していることは、主イエスの遺体の「不在」をきっかけにして、見えないものに目を注ぐことの大切さ、すべてが行き詰って先行きが見通せない状況の中でも、それを打開する神の力を信じることの重要性が語られていることです。キリスト教の復活物語は墓から始まります。通常、墓はこの世での活動や計画、あらゆる人間的な希望、生の営みの終着点です。人間にとっては絶対にこの先がないと思われる場です。ところが、そのような墓から主イエスの復活の物語は始まるのです。

朝まだ暗いうちに、女性弟子であるマグダラのマリアが墓を訪れると、墓の入り口をふさいでいた大きな石が取り除けてあるのを見ます。そのことでイエスの遺体を取り去られたと思っただけは、ペトロと愛弟子に「不在」を知らせます。すると、二人は急いで墓に行き、墓の中に遺体がないことを確認します。ヨハネ福音書記者がまず強調していることは、ペトロと愛弟子がイエスの遺体が「不在」であることを『見て、信じた』（8節）ことです。本当はマリアもペトロも、24節以下に登場するトマスも、イエスの遺体を「見る」ことで、イエスの「実在」を確認したいのです。イエスは死んだので人格的にも「不在」なのに、彼らはイエスの「実在」を遺体によって確認したいのです。マリアがイエスの遺体を探したのも、トマスが手とわき腹の傷跡を実際に見ないと復活の事実を信じないと主張したのも、どのような形であつてもいいからイエスの死という「不在」の中で「実在」を確認したいからでした。このことは「見えなければ信じない」という現実主義者が主張する考え方と同じ思考パターンです。そのような意識を持った人間にとって、見えないことはイコール存在しないことだからです。ところが、主イエスの「不在」の中に、復活した主イエスの「実在」を確認することができる信仰の扉があるのです。ですから、19節以下で復活のイエスは弟子たちに顕現し、トマスに傷跡を見せるのです。ただ、復活のイエスはそのことを無条件で容認していません。そのことは、ヨハネ福音書の最後で『わたしを見たから信じたのか、見ないのに信じる人は、幸いである』（20章29節）とイエスが断り書きのように語っていることでわかります。復活したイエスを目で見ることはできなくても、信じることの大切さが、ほかならぬ復活したイエス自身の口を通して語られているのです。つまり、ヨハネ福音書はイエスの物語の帰結のところ、見ないで信じる信仰をいかに養うかがキリスト教信仰にとって重要であることを示すのです。「見えないものに目を注ぐ」ことが、目に見える現実世界にばかり目を奪われていると、事柄の本質に気づかないことが起こるといふことです。目に見えないことの、その先を見て信じることがなければ信仰の扉は開きません。普段、私たちは自己決定的に思考し、行動しています。しかも、形あるもの、有益なものを「獲得」することが人生を満足させることだと理解しています。確かに目に見えるものは確認しやすいからです。そのために勢い、心などの「目に見えないもの」は後回しにしてしまうのです。

それにしても、なぜマリアは墓の入り口の大きな石が取り除けてあるだけで、イエスの遺体が墓の中にないと考えたのでしょうか？ それは2節で『主が墓から取り去られました』と訳されている箇所の原文が「彼らは主を墓から取り去った」となっているためです。日本語には訳出されていませんが、原文には「彼ら」があるのです。マリアは、誰かはわからないけれども、とにかく複数の人間が主イエスの遺体を墓から持ち去ったと考えたのです。ペトロと愛弟子はイエスの遺体が「ない」ことを『見て、信じた』（8節）のですが、ただ、それによってイエスが復活したことを直ちに信じたわけではありません。この段階で彼らが信じたのは、イエスの遺体がないというマリアの報告を信じたことにとどまっています。

こうして11節以下で、見えないけれども「信じる」対象として「実在」する復活のイエスを「見て、信じる」ことの意味が描かれていくのです。マリアは、イエスが十字架上で殺された今となっては、その遺体を引き取る以外に生前のイエスとの絆を確認することができないと思ひ込んでいました。彼女はイエスに出会ったことで、生きることの痛みと傷、苦悩と呻きのすべてをイエスに受け止めてもらったことで、神と共に生きること、他者と共に生きることができるようになったのでした。だから、イエスが十字架上で殺されて命が「取り去られた」だけでなく、その遺体までもが誰かに取り去られたと受け止めたことで、その悲しみは極限に達しました。マリアにとって、取り去られたものはイエスとの絆によって生まれた「いのち」だったのです。愛する存在を喪失した悲しみに支配されてマリアは今日に見えないものに目を注ぐことができないのです。しかし、取り去られたと思っていた主イエスが、復活してマリアの後ろに立っているのです。主イエスは死を越えて復活することでマリアとの「いのち」が途切れていないことを示しているのです。主イエスは死を越えた「新しいいのち」をその復活したからだに帯びてマリアの後ろに立ち、発見されることを待っているのです。この不思議な体験が復活したイエスを信じる信仰へと転換させていくのです。

遺体が不在であることを見て、その不在が実は自分の生き方において、忘れがちだった「目に見えないものに目を注ぐ」ことの大切さに気付かせたのです。17節で主イエスが『すがりつくのはよしなさ』と言っているのは、生前のイエスとの関係性でもって、この復活の「いのち」を見ることはやめなさい、という意思表示なのです。マリは『うしろを振り向いて』（14節）復活のイエスを『見る』（14節）が、マリアの意識は生前のイエスに向けられているので、復活したイエスを見出し出すことができます。このようなマリアに対して復活のイエスは手を差し伸べます。その言葉が『だれを探しているのか』（15節）という声かけです。実はこの言葉は1章38節で弟子を召命する場面でも『あなたは何を求めているのか』と訳出されていますが原文では同じなのです。生きる上での存在基盤を問う言葉であると同時に、復活したイエスの新しい「いのち」に生きなさいという促しの言葉でもあるのです。この新しい「いのち」を注ぎ続ける復活のイエスを「わたしは見ました」と信仰告白しながら、この世の歩みを成していく一人ひとりでありたいものです。そこに希望があるからです。